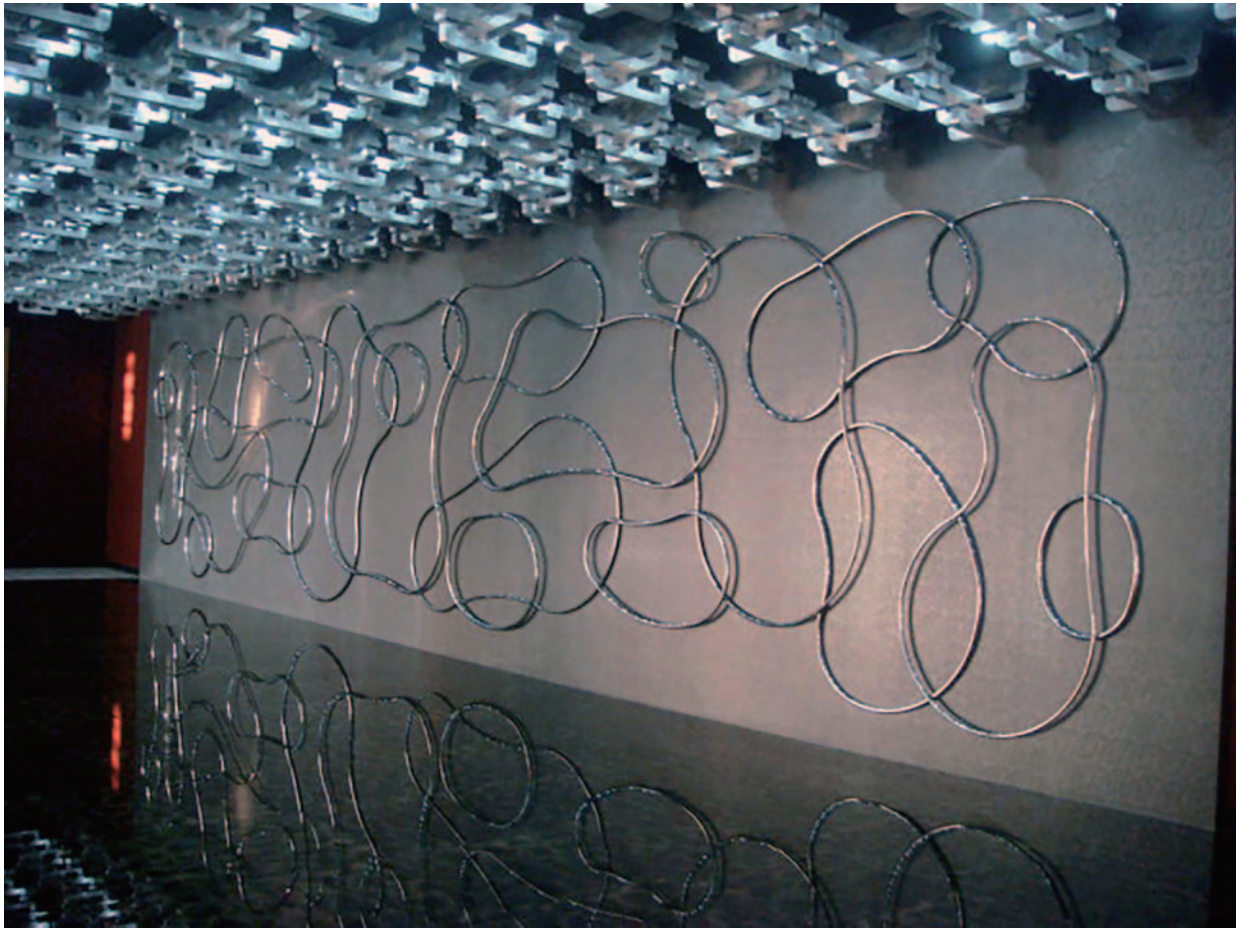




伊藤隆道

「気ままなリング」(上海月湖会館)
ステンレス40ミリ鏡面パイプによる壁面レリーフ

撮影 齋藤亮一



2015年7月 会報71号

一般社団法人

日本建築美術工芸協会



菱形レリーフ「弧形とひかり」
(上海月湖会館)
撮影 齋藤亮一

伊藤隆道

1939年 北海道札幌市に生まれる
1962年 東京芸術大学卒業
同年から銀座資生堂会館ショウウインドウデザイン手掛ける
1968年頃から野外彫刻展に招待出品 多数の賞を受賞 動く彫刻作品で彫刻家としての評価を得る
1970年 大阪万博 その後沖縄海洋博 つくば博等に参加
1993年 東京芸術大学教授就任 デザイン教育にも携わる 舞台美術も手掛ける
2004年 上海個展 その後中国での展開も加わる 08年上海彫刻公園月湖美術館館長就任
現在 東京芸術大学名誉教授 環境芸術学会名誉会長 当会会員

CONTENTS

平成27年度 通常総会		3~4
第53回aaca講演会「いきいきした空間のつくりかた」	赤松佳珠子	5
第185回aacaフォーラム 「資生堂銀座ビルを通して～ 芸術と技術をシームレスに融合させる」	濱野裕司	6~7
芦原義信賞を受賞して（新人賞） 「琵琶湖のエコトーンホテル」と 「風の音」で試みたかったこと	芦澤竜一	8
aaca景観シンポジウム「アートが創る都市空間」	岡 房信	9
時代の華一輪「汚れないマンネリズム」	河村純一郎	10
時代の華一輪「私の創作活動」	櫻井孝美	11
時代の華一輪「ニューヨーク展開催について」	高橋幸子	12
会員活動レポート 「土」— セラミックスにおける技術開発を通して	吉川盛一	13
寄稿 木の魅力を伝える 日本建築の美とプロポーション（1）	今里 隆	14~17
アピアランス 会員紹介		18~19
新入会員・会員の異動・募金のお願い		20

平成27年度 通常総会

aaca

平成27年度通常総会は 6月11日(木)午後5時45分より建築会館大ホールにて、会員数337名(個人会員250名・法人会員75名、定足数163名)の内205名(出席者67名、議決権行使書・委任状提出138名)の出席を得て開催された。定款15条の定めにより会長の岡本 賢が議長に選任され、又同18条により議事録署名人に小谷純造会員・米林雄一会員の2名が指名され総会が開始された。



岡本会長

岡本会長より挨拶があった。

皆様 27年度通常総会に大勢お集まり頂き有難うございます。平成26年度は大変いろいろと会員の皆様方の活発な活動をしてまいりました。おかげ様で社会での協会の存在価値も益々高まってきた事と思います。景観シンポジウムをはじめ、AACA賞、AACAフォーラム、展覧会は新しい企画として「街なかミューゼ」が始まりましたし、建物視察会、調査研究トーク、地域との文化交流、情報誌の発刊・HPのリニューアルなど多岐にわたった事業を展開しております。

新しい会員の獲得のため 会員増強委員会が設けられ昨年は個人会員21名・法人会員が13社入会されました。これも会員増強委員会のメンバーや会員の皆様の努力の賜物と感謝申し上げます。

今年度より会員の皆様へ会員証を発行致しました。現在協会の委員会等で活動されている皆様には協会の存在意義は理解されていると思いますが、そうでない

方々には会員として認識されるチャンスは少ないのではないかと考えまして、皆様が共通の認識で活動して頂くため「憲章」を定め、会員証の裏面に記載させて頂きました。この「憲章」の下で協会活動をおすすめ頂きたいと思います。又現実的な会員メリットとして会員がよく利用されている画材店と提携し、画材等を購入の際会員証の提示により「20%引き」が可能となりました。適用店舗は協会ホームページに「会員特典」に掲載しております。また美術館とも交渉しており会員優待として、美術館の割引入場券の配布も始めました。

すでに会員の皆様・新たに入会された皆様には協会事務局にお集まり頂き、親しく交流・情報交換して交友関係を広げられ自身の活動をされる場をお創りください。どうぞこれからも協会の発展にご尽力頂きますようお願い致します。

つづいて議案の審議に入った。

第一号議案・平成26年度事業報告に関する件を岩井専務理事、第二号議案・平成27年度 貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び収支計算書に関する件を石田理事・事務局長より提案説明があり、また村松監事より26年度の会計及び業務について監査報告がなされ、議長採決の結果第一号・第二号議案は満場一致にて承認された。

第三号議案・長期会費滞納会員の処遇に関する件も提案どおり議長採決により満場一致にて承認された。

第四号議案・平成27・28年度理事・監事の選任について議長より提案があり採決により満場一致にて承認された。

引き続き別室にて理事会が開催され、役員選任・委員長委嘱について審議決定しその結果を、総会会場にて議長より出席者に発表された。最後に平成27年度事業計画・事業予算書について石田理事・事務局長より報告があり、平成27年度通常総会は滞りなく終了した。

総会の後、平成26年度AACA賞奨励賞を受賞された、「L'angolono」「八海山雪室」「Silver mountain & Red Criff」3作品についてそれぞれの受賞者よりプレゼンテーションが行われ、最後に岩井副会長の発声で交流会が開かれ、会員の交流が深められ、途中新入会員の紹介、近々開催予定のシンポジウム・街中ミューゼ・フォーラム等の案内が行われ最後に安河内副会長の中締めにより散会した。(司会 立石博巳総務部会副部長)

平成27・28年度 協会役員の紹介

aaca

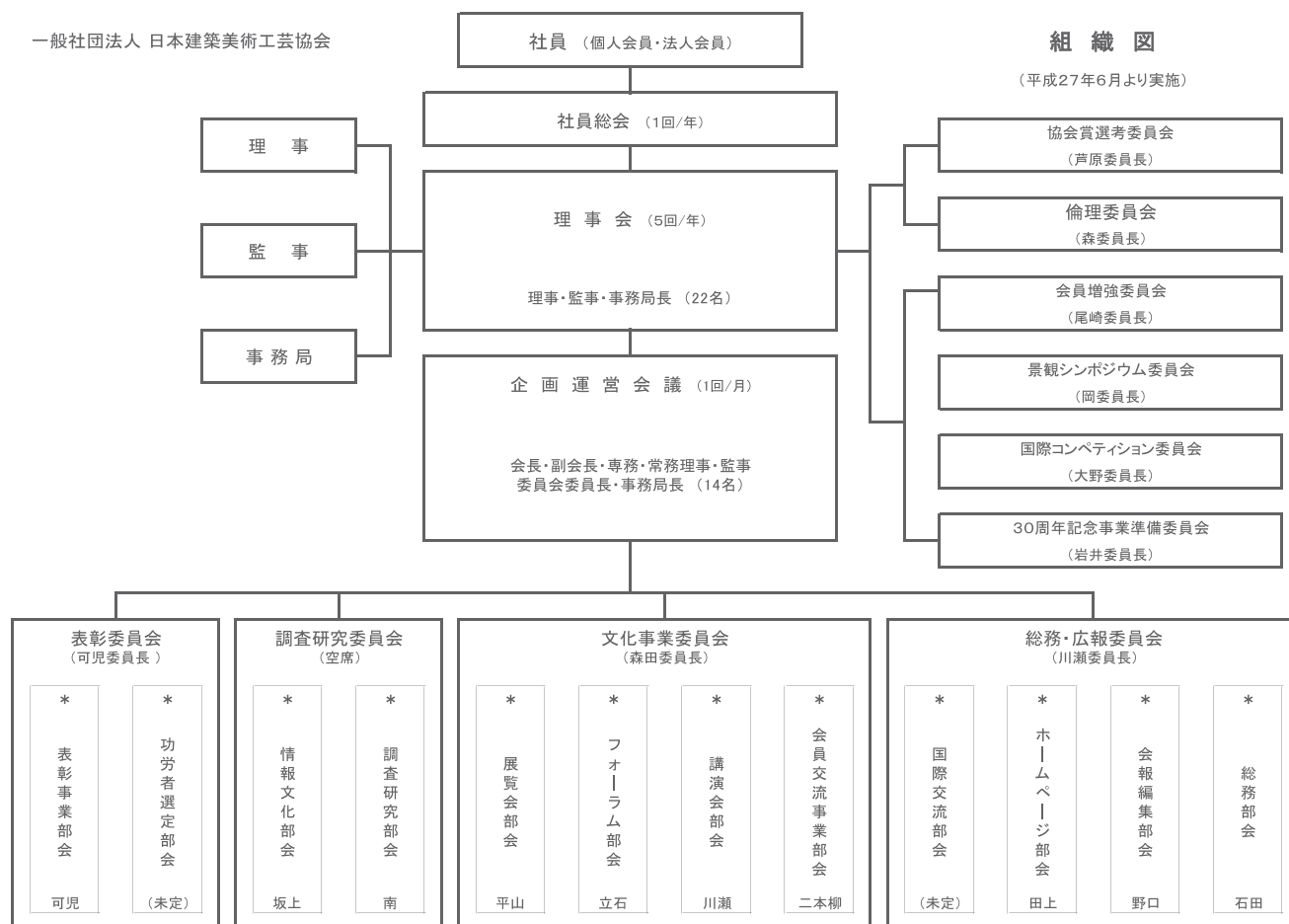
会 長	岡本 賢 (再任)	理 事	芦原太郎 (再任)	理 事	日置 滋 (新任)
副 会 長	岩井光男 (昇任)	〃	大成 浩 (再任)	〃	本 耕一 (再任)
〃	岡 房信 (昇任)	〃	尾崎 勝 (再任)	〃	森 暢郎 (再任)
〃	安河内敦子 (再任)	〃	亀井忠夫 (新任)	〃	米林雄一 (新任)
専務理事	川瀬俊二 (昇任)	〃	可児才介 (再任)	〃	六鹿正治 (再任)
常務理事	大野 勝 (再任)	〃	佐藤仁美 (新任)	〃	石田真人 (再任)
〃	森田高年 (昇任)	〃	東條隆郎 (新任)	監 事	村松映一 (再任)
				〃	中島三枝子 (再任)

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

社員（個人会員・法人会員）

組 織 図

（平成27年6月より実施）



◎特別委員会

- ・ 協会賞選考委員会
委員長 芦原太郎理事
- ・ 倫理委員会
委員長 森 暢郎理事
- ・ 会員増強委員会
委員長 尾崎 勝理事
- ・ 景観シンポジウム委員会
担当 岡 房信副会長、
実行委員長 川瀬俊二専務理事、
副委員長 日置 滋理事・本 耕一理事、
- ・ 国際コンペティション委員会
委員長 大野 勝理事、
- ・ 30周年記念事業準備委員会
委員長 岩井光男副会長、
副委員長 岡 房信副会長、
安河内敦子副会長、

◎常置委員会

- ・ 表彰委員会
委員長 可児才介理事、
副委員長 六鹿正治理事
- ・ 調査研究委員会
調査研究部会 部会長 南 三一郎、
情報文化部会 部会長 坂上直哉、
- ・ 総務委員会
担当 岩井光男副会長
委員長 川瀬俊二専務理事
総務部会 部会長 石田眞人理事、
会報編集部会 部会長 野口真理、
ホームページ部会 部会長 田上秀司、
- ・ 文化事業委員会
担当 岩井光男副会長、
岡 房信副会長、
大野 勝常務理事、
委員長 森田高年常務理事
会員交流部会 部会長 二本柳 敏、
講演部会 部会長 川瀬俊二専務理事、
展覧会部会 部会長 平山健雄、
フォーラム部会 部会長 立石博巳、



赤松佳珠子

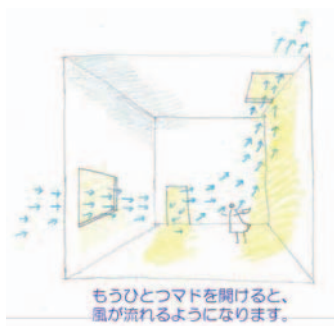
建築家 CAパートナー

法政大学デザイン工学部

建築学科准教授

『建築はものではなく出来事である』

建築空間を考えることとは、そこにある「モノ」によって、そこで起こる「コト」を考えることです。その場所で、そこにいる「ヒト」がどれだけ気持ちよく、いきいきと過ごすことができるのかがとても重要です。



〈世界は事実の寄せ集めであって、物の寄せ集めではない〉とはヴィトゲンシュタインの言葉。〈建築は‘もの’ではなく‘出来事’である〉とは原広司の言葉ですが、これらの言葉が示すように、建築はコンクリートや鉄やガラスなどの物質を用いて造られていますが、出来上がった建築空間は決して無機質な箱なのではなく、あくまでもそこで起こる出来事を発生させるためのデバイスなのです。建築空間は、風・光・アクティビティなどの様々な要素の取り扱い方次第で、魅力的でいきいきとした空間になるかどうかが決まるのです。

『雑木林のなかに教室群が滑り込む』

熊本アートポリス参加プロジェクトで、第21回 aaca 賞を受賞した宇土小学校です。宇土小は熊本市郊外の住宅地に位置しており、既存校舎のグラウンドの南側



には、熊本らしい力強い樹木が茂っていました。校舎の向こう側に見える、突き抜けるような青空と濃い緑、そして子供たちの笑顔が印象的で、それらを新しい校舎でも受け継ぎたいと考えました。日本では、まだまだ小学校の教室にはエアコンが無いことも多く、ここでも学校の南西に位置する白山からの弱い風をいかに学校全体に行き渡らせるか、が大きなテーマとなりました。ルイスカーンは、1本の樹の下で語り始めた人の話を聞きに人が集まる—それが学校の起源である、と言っています。この木と同じような存在であるL字型の

壁が敷地全体に散らばって、その場所が学校となる。雑木林の中に教室群が滑り込む、限りなく外の様な学校が実現しました。

『木立の広がりによりアクティビティが見え隠れする光と風に応答する建築』

流山市立おおたかの森小・中学校及びおおたかの森センター、こども図書館では、宇土小のL壁をもっと面的に展開しています。学校と地域施設が一体とな



ったこのプロジェクトは、新しい住宅地における交流拠点として、幅広い世代の人たちが集う街の核となる場所です。隣接するおおたかの森の緑を住宅地へと繋ぎ、光や風が通り抜ける学校を目指しました。今年の4月に開校したばかりですが、市民向けの見学会では4000人近い人たちが訪れ、地域の人たちの期待の高さを実感しました。

『国道の中州に浮かぶシティ・ゲート』

広島では、アストラムラインという新交通システムが市内と郊外を繋いでいます。市内では地下ですが、JRの高架をくぐると地上に顔をだし、そこから先は高架橋の軌道を走ります。新白鳥駅はJRとの新しい乗継駅として、その交差点につくられました。大きな国道の中州という特異な敷地のコンテキストから導き出されたフォルムは、アストラムライン乗客だけでなく、車、バス、新幹線内からもよく見える、新しい広島のランドマークと言えます。薄いシェルには大小の丸穴が開いています。シェルは、国道の激しい交通から人々を柔らかに守りながら、光や風が通り抜けて行きます。



『歴史ある住宅地に生まれた新たな地域の拠点』

最後は、流山と同様に、立川市立第一小学校、柴崎図書館、学童保育所、学習館が複合化された地域の拠点施設です。創立140年を超える立川第一小学校の耐震建て替えに伴い、その他の地域施設を複合化させる計画で、すべてが既存施設からの移行であったため、打ち合わせ相手は相当数に上り、当初は反対意見もありました。それら様々な議論を経て完成したこの建物は、歴史を刻んできた住宅地の中に、子ども達の姿や地域の人々の活動が見え隠れする、新たな多世代のための活動拠点としていきいきと使われ始めています。



濱野 裕司

株式会社竹中工務店

東京本店設計部

日本建築美術工芸協会 法人会員

本日はこのような機会を頂きありがとうございます。最近の作品であります「資生堂銀座ビル」は突然生み出されてのでは無く、今までの建築に対する自身の考え方や経験・実績、そしてこの建築を取り巻く、様々な環境含めて生み出されました。そこで私が普段気に留めている、「芸術と技術」をシームレスに融合させる、との話を中心に据えて、この建物が創られた経緯や背景も含め、講演会を行わせて頂いただければと思います。

この題目である「芸術と技術」ですが、「芸術」を、文化・美・価値観・歴史・伝統…そして、そこから生まれる人の「想い」とし、「技術」を、設計・品質・生産・創造・未来…から生まれる「建築」と置き換えて、更に新しい価値をデザインするために「歴史や伝統」から学び「未来を創造」していく、との内容に繋がっていければと思っています。

・プロフィール

まず自己紹介になりますが、私は竹中工務店設計部で設計ISD部門長として、大型複合施設や事務所ビル・商業施設から店舗・住宅など、幅広く設計を手掛けてまいりました。その中にあって常に、その建築が持つ背景や歴史そして人の想いをもとに、未来に向けた新しい価値観を、いかに建築に組み込むかが課題だった様に思えます。

・アートと建築との接点

自分が東京芸大の出身という事もあってか、自分の担当している建物に、初期段階から設計的な要素として自然とアートの要素を取り込みたいと考えていました。プライベートミュージアムのイブタンギー美術館では、作者の絵から飛び出て来た様な扉の取手をオリジナルで創り、東京ドーム・ラクーアでは、不思議の水の国のイメージを生む数多くのモニュメント、また、横浜ダイヤビルや中華レストランの富麗華などでは、海外著名アーティストの作品を建築に融合させる試みを行ってきました。設計デザインに、要求される用途や機能・性能や環境を満足させる事は当たり前として、その建築と融合された芸術的な要素や表現が、建物に高い魅力と文化性をも生むと思っています。

・シームレスな外装への想い

外装は建築を形づくる大変重要な要素です。自分の想いとしてより明確で力強いメッセージを建物に与える為に、シームレスな外装表現にこだわってきました。



建築の多くは工業製品としての建材で造られるので、様々な場所に物の取り扱いとしての目地は必須になりますが、様々な工夫を凝らす事で、感じにくくする表現方法を模索してきました。横浜ベイクォーターではやわらかな曲線を縦型アルミスパンドレルで表現しリボンの様な表現を追求しました。御徒町駅前の松坂屋パークプレイスでは初めて本格的なアルミシェードを経験し、東急プラザ表参道原宿では外装を六角形のプレス材で反復する事で、建物を一つの塊として見せています。クロス銀座と言う建物では、開口部の表現や照明計画により、建物の階数や層間を無くす表現を目指しました。その様な経験の踏まえた中で、資生堂銀座ビルの設計に取り組みしました。

・資生堂銀座ビル



銀座で創業し、銀座と共に発展してきた資生堂の銀座並木通りに建つ本社旧社屋（1966 年竣工）の建替えとして、クリエイティブ機能を有する部門を集約したオフィス、ホール、レストラン、商業スペースを有する新本社社屋。未来に向けた新しい価値の創造と、ブランド力の強化のための「価値創造拠点」として計画されました。

設計デザインコンセプトを「先進性・豊かさ・オリジン」とし、高い耐震性や環境配慮など最新エコ技術の導入と共に、外装から内装の細部にわたるまで、社名の由来でもある「万物資生」の精神にこだわり、普遍的な自然素材やデザインモチーフを革新的な表現で展開しました。特に基調となるデザインには、建築主の文化を象徴する「花椿」や「唐草模様」を用い、資生堂宣伝制作部とのコラボレーションにより「美」の価値観の共有を行っています。



（外装）特徴的な建物外装を一体で覆うアルミシェードは、オリジナルデザインの「未来唐草」で構成されています。約幅1800mm、高さ4250mm、厚さ300mmが1ユニットとなり全体をシームレスに構成しています。形状は美的観点、安全性、生産性、環境性など様々な視点から検証し決定されました。唐草のシェーブは1本の洗練されたラインが前後左右上下に美しく連続するようにデザインされ、人の手によってしか出来ない工程を経て、風格・味・色気を生み出しながらも、3次元モデルによるモックアップ製作や構造解析、防汚対策として光触媒の採用、生産性と層間変形などの実験及び検証など、最新技術を駆使して生み出されています。自然光や視線の制御をしながら、流麗な景色・インテリアを生み出し、銀座の街に資生堂らしい景観を創出しています。

（インテリア）内装は、外装と呼应しながら、やはり「万物資生」をキーワードに、自然の美しさ、豊かさを、素材と有機的な曲線、光で表現しました。外装か

らエントランス、低層部のギャラリーやホールなどの受発信拠点であるコミュニケーションスペースから、ワークプレイスと、いかにシームレスにデザインをつなぐか、ある意味で建物とアートが一体になって訪れた人すべてに「資生堂」を感じてもらう様に心がけました。



今後、資生堂グループのミッションである「美しい生活文化の創造」に向け、この創業の地より様々なクリエイティブが発信される事を願っています。

・新しい価値を創造する

資生堂というある意味で近代日本の文化や美をけん引してきた企業の新店の設計に関わった事で、またあらためて、新しいデザイン・発想は先人達が、築き上げてきた「文化や伝統」から生まれる事を実感しました。更に先人が築き上げた「文化や伝統」に「新たなデザイン」・「技術」を融合する事で、新しい価値「コト」が生み出されると確信しております。最近、設計担当した日本橋ダイヤビルでは、1930年に竣工した三菱倉庫江戸橋ビルの躯体を極力活かしながら、レトロフィット免震など最新の技術で新たな価値を建物に与えています。また明星大学記念図書館のプロジェクトでは歴史や物語、そして人の想い、「人」と「人」の結び付き、「縁」の大切さを強く再認識しました。

ちょうど講演会当日は3月11日。この大震災で目にしたのは、私達の文明が一瞬で無くなる姿でした。「建築や都市」を失うということは即ち文明生活を失う、逆に言えば私たちの文明は「建築や都市の姿」で建ち現れているとも言えます。「歴史・伝統」から学び「未来を創造」すること、すなわち、可能な限り、建築としての「モノ」ではなく、「芸術と技術」をシームレスに融合させ、新しいデザイン、新しい価値を生み出す「コト」創りをめざし、今後も設計に携われて行ければと思っています。

（資生堂撮影 ナカサアンドパートナーズ・伊佐 猛）



芦澤 竜一

一級建築士

株式会社 芦澤竜一建築設計事務所

滋賀県立大学 准教授

日本建築美術工芸協会会員

今回の芦原義信賞を受賞した計画は、琵琶湖の湖岸への提案であった。話がはじまってから竣工まで約5年を費やした。これはランドスケープを含め湖岸全体の提案であったため、竣工で終りではなく今後も継続的に取り組むべきプロジェクトであると考えている。

今回の最大のテーマは「エコトーンの再生」である。琵琶湖周辺で計画することがはじめてだったこともあり、依頼を受けて、まず自転車を使って琵琶湖を一周してみることにした。琵琶湖の周囲は200kmあり、何日かけて湖岸とそこに息づくものの様子を観察することができた。人々の棲み方も含めて、多様な生物の宝庫であった。そして、わたしは徐々に琵琶湖に魅せられていった。

また琵琶湖周辺に住む多くの人々の意識に触れることができた。今回お願いすることになった地元の左官職人曰く、「この辺の人は皆大地の歴史を意識している。地球ができたころまでは遡れないが、琵琶湖が生まれた歴史ぐらいは意識してここに住んでいる」この言葉が印象的であった。彼によって琵琶湖周辺の大地の歴史を知ることができ、その歴史である土を最大限に取り入れることができた。

琵琶湖は、400 年以上前に三重の伊賀あたりで誕生し、構造運動（断層運動など）を繰り返し、北へ向かい40 万年前までに現在の位置まで動いてきた「移動する湖」である。移動の衝撃により、琵琶湖を取り巻く周囲は内湖のような地域固有の地形も含め多様な地形でできおり、湖岸もまた様々な表情をしている。とりわけ湖岸は、多くの機能をもち重要な場となっている。その機能とは水域と陸域の間にあるエコトーン（生態の移行帯）といわれる。

エコトーンには、多様な生物の生息場所はもちろんのこと、有害物質の除去や浄化や、波浪の抑制や浸食防止、そして人と自然とが繋がる場であり、生活において欠かせない要素を担っている。

しかしながら、高度経済成長時期、琵琶湖総合開発によって湖岸道路や土地改良によってエコトーンは減少し、水質汚染の問題を抱え、人間が目先の利益を追求した結果はすぐに分かりやすく顕在化した。そして一部の周辺住民は、自らの行為の代償はあつという間に自らに降りかかってくることを知り、生活のあらゆる見直しを即座に取り組み、近年ゆっくりとした再生への兆しが表れてきている。

その解決方法において重要なこととして、ただ琵琶湖周辺が良くなればいいというものではなく、周囲の山林、山林から流れ落ち、琵琶湖に流れ込む河川、そして琵琶湖から周辺に向かって流れ、さらには海へと繋がっていく河川といった連続する自然環境を人間が意識することであり、そこに息づくものも全て繋がっていて、また過去から未来へ長い時間軸もまた繋がっているということを想像することが必要であることだと実感した。今回の計画では、この繋がりを人間の活動、視覚的、時間的にも顕在化しようとし、建築をつくるプロセスにおいても重要なテーマとした。これが「エコトーンの再生」というテーマにした理由である。そのためこのプロジェクトでの我々の関わりは未だ終らず、竣工後はホテルのゲストや周辺住民、学生達と共に、ハズバンダリー（生態系の遷移の役を担う）というかたちで関係を保ち続けている。

さらにもうひとつ試みたかったことがある。琵琶湖のポテンシャルを引き出すことをテーマとして、この場所の一つの重要な要素と感じた琵琶湖から吹く風を最大限感じる空間をつくりたかった。そこで、ホテル棟は、穏やかな季節には極力空調を必要としない風を感じる空間をつくり、またチャペル棟では、風の神が奏でるエオリアンハープという楽器としての建築をつくることを試みた。自然界の現象を、視覚化したり聴覚化したりすることで、日常あたりまえの自然現象を改めて感じ、同時に人間の創造を超えた神秘性の帯びたものとして捉えなおすことができるのではないかと考えている。このような思考は、合理性に満ちた現代社会において、建築が持ち得るひとつの可能性だと考えている。

竣工後、風の神が微笑みながら、目を閉じ耳をすませじっと空間に身を任せる訪問者を見つめ、気ままに音を奏でているようだといつも感じる。そしてこの建築を通して、我々は多次元的に思考する必要があると感じている。建築をつくるという役割を担っている私が今後、建築という人為をいかに捉え、自然界の中でどのように振舞えるかが重要だと感じている。



撮影 市川かおり



岡 房信

景観シンポジウム委員会担当副会長
日本建築美術工芸協会会員

平成26年度景観シンポジウム事業の第2弾にあたる頭記のシンポジウムは、去る1月30日（金）に早稲田大学国際会議場井深大記念ホールで開催されました。今回の参加申込は学生、招待者56名を含め全体で258名、うち104名の方々にはシンポジウム終了後の交流会にも参加申込を頂きました。



当日の都心は朝から雪に見舞われましたが、多くの来場者をお迎えする事が出来ました。来場者の皆さん並びに関係者の皆さんに篤く御礼申し上げます。シンポジウムの内容は会報別冊に譲ることとし、本稿では企画・運営面での工夫を中心に報告させていただきます。

① テーマ・登壇者について

ここ数年の景観シンポジウムが扱ってきたテーマを振り返ると、「21世紀の歌舞伎座と銀座」（第23回）、「明治神宮と原宿」（第24回）、「新しい都市景観へー東京のこれから」（第25回）と、継続して建築が主題にされてきたことが判ります。今回、第26回の企画にあたっては、日本建築美術工芸協会の成り立ちを意識して、久々にアートに正面から取り組む事としました。そして、当協会理事である本耕一氏から様々なアート・プロジェクトの監修者を務められ森美術館館長でもある南條史生氏をご紹介頂き、シンポジウムへのご協力をお願いしました。その結果、南條氏には「アートが創る都市空間」というテーマのもと、シンポジウムのモデレーターをお引受頂く事になりました。

またパネリストとしては先述の本耕一氏にもご登壇頂くこととし、加えて南條氏からのお声掛けによって、

日頃から国際的なスケールで活動して居られる照明デザイナーの石井リーサ明里氏と彫刻家の名和晃平氏にもご登壇頂く事になりました。



「複合型都市開発におけるアート小史」について

今回のシンポジウム会場では「参考資料」として「複合型都市開発におけるアート小史」を配布しました。これは、森美術館の前田尚武氏、高橋美奈氏をはじめとする学芸グループの皆さんのご協力のもとで作成されたオリジナル資料です。バブル崩壊後の“失われた時代”と称される事の多いこの期間（1995-2015）ではありますが、実は多様なパブリック・アートやコーポレート・アートが都市空間に展開されてきた事が示されています。記述が不完全な項目も残っていますが、研究者や実務家の皆さんに不備を補って頂き、情報の乏しいこの分野での基礎資料として充実させて頂ければ望外の幸いです。

② 集客活動について

ご案内の通りシンポジウム委員会には常時の在籍者は居ません。業務発生の都度、主に文化事業委員会と事務局の支援を仰いで集客を含む事務作業を進めています。今回の集客活動に関連して報告しておくべきことは、従来のaaca景観シンポジウムを含む各種イベントで集積された参加者のリストは個人情報保護の観点から利用不可とされた事です。このためaacaのウェブサイト上での告知を除き、aacaからのメール等での告知は会員に限定して実施することになりました。aacaからの告知先の減少分を補完するために、有志の方々には“個人的な勧誘”をお願いしました。最終的には冒頭に示した通りの多くの参加者を得られました事を、ご協力下さった皆様に改めて篤く御礼を申し上げます。

なお、今回の参加申込については、書式はもとより記入された参加者の氏名等も個人情報保護の観点から事務局で一元管理される事になっております。景観シンポジウム以外のイベントでの集客にも関係する可能性もあるかと思しますので、ご参考までに報告します。

最後に、シンポジウム事業が今後も持続可能な事業となるよう、皆さまの引き続きのご協力をお願い申し上げます。報告と致します。

（以上）



河村純一郎

画家

行動美術協会会員

日本美術家連盟会員

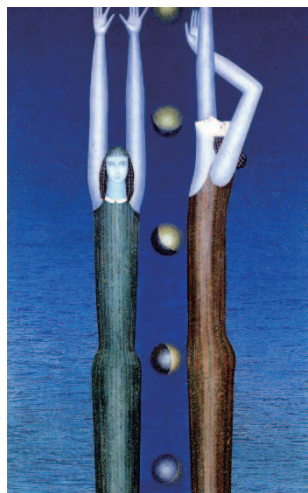
日本建築美術工芸協会会員

毎日同じことを繰り返しながら、しかし、慣れることなく続けていく・・・一見、単調と思われる繰り返し、マンネリ、でもその時間の流れの中には、派生の瞬間を待つ可能性が常に堆積しているのです。“偉大なるマンネリズム”僕の中でいつしかそう呼んでいます。例えば、毎日一緒にいて顔を見ている人のいい所を、ある日再発見するような、日々の創作とはそんな関係でありたいと思っています。過した時間や、重ねた経験があるからこそ気づく、華やかな驚きがあるのです。

僕は、山口県岩国市の錦帯橋を流れる錦川の上流、中国山脈の麓の田舎町で少年時代を過ごしました。夜になると星しか見えない、森や水に恵まれた所でした。小さな町でしたが、鍛冶屋、和紙すき、馬の蹄鉄、砥石屋に竹細工等の職人さん達がいて、活気がありました。自然の中にも町の中にも、毎日の学校の往復には道草の誘惑があふれていました。実は、「この模様かっこいいなあ」って感じる時、あの頃釘付けになった職人さんの手さばきが蘇っていたり、「今年は蝉があまり鳴かないな」と思うのは、あの頃の蝉時雨と比べていたりするんです。

山口県文化振興財団主催の個展の際に、僕の敬愛する文学者の方に、こんな執筆を頂きました。～かつて詩人リケルは「詩はほんとうは経験なのだ」と言った。一行の詩のために、多くの都市、多くの人々、多くの書物をみななければならない。まだその意味がつかめずに残されている少年の思い出。海辺の朝。海そのものの姿。それらを思いめぐらせなくてはならない。そして、追憶が多くなれば、つぎには忘却できなければならない。そして、追憶が血となり、眼となり、表情となり、名前のわからぬものとなり、もはや私たち自身と区別することができなくなって、初めてふとした偶然に、一遍の詩の最初の言葉がぼっかりと生まれてくるのだ、と。これにならって言えば、河村さんの作品は、「絵は経験である」ということになる。人物の背後にくりかえしくりかえし描かれる海や空、そしてそれらの色は、河村さん自身（人物）の「経験」となっているのだ。「遠い日」「住めば都」「あの日のこと」。そこには、20数年前私たちが初めて出会ったマドリッドや、あるいは一緒に見たリスボンの海なども、河村さんに固有な幼・少年時代のすべてを反芻するために、もしかすると描き込まれているのかもしれない

(相原 勝：ドイツ文学[ツェーラン研究])



第54回行動展 住めば都
ミクストメディア 227cm×146cm



第68回行動展 あの日のこと
ミクストメディア 227cm×146cm

追憶というマンネリズム？なののでしょうか。

マチエールへのこだわりや、色の持つ抒情性を大切にしていることも、ある種のマンネリズムでしょう。時間の経過を感じさせるような質感や色に魅かれます。積もったホコリを指で擦るとキラリとのぞく、そんな色が出せるといいなと思います。昔から骨董が好きで、特に焼きものに興味をもっています。肌合いが好きです。そういったマチエールの中に、人もどきの心象人物を描きたいと思っていました。この人もどきを、最近、陶器の立体へ試みたりしています。三次元の世界から二次元へと向かっていながら、次は二次元から三次元へ、戻るのではなく新生していくことを楽しんでいます。野山の花や山野草、ずっと描きたいと思っていました。心象画と同じ思いがマチエールに込められ、花たちの肖像画だと評された時は嬉しかったです。

表面化される美と深遠なる美、西洋と東洋、絵画とデザイン、虚と実、そんな狭間のニュートラルな世界をさまよいたいと思っています。これからも続いていく日々の細やかな営みは、やがてまた悠久のマンネリズムとなり、無意識とも意識的とも言えぬ変遷を育んでいきます。どんなに繰り返しても、逆に繰り返すことによって、ますます研磨され、新鮮で、豊かになっていくのです。汚れないマンネリズムです。



大切なこと h:36cm (陶器)



櫻井孝美

画家

日本美術家連盟会員

日本建築美術工芸協会会員

当協会の会員となり五年が過ぎました。以前から存じ上げておりましたが、今は亡き加藤貞雄先生のお誘いでした。日本建築美術工芸協会の主催による「21世紀・絵画手の仕事」展が2009年の10月、丸の内行幸地下ギャラリーにて開催され参加しました。企画者は加藤先生と思っております。そのご縁で当協会を知り加藤先生と再会しました。この展覧会は搬入展示搬出と忘れられないハプニング続きでした。搬入展示当日は台風で風と雨の洗礼を受けました。その上展示開始時間は真夜中の0時近くからで通路のシャッターを閉めてからの展示作業でした。私は300号の富士や150号、100号の作品数点を展示しました。個性豊かな作家による大作での作品群との競演となり愉快的な思い出深い展覧会でした。展示は徹夜作業にもかかわらず加藤先生も最後まで立会って下さり翌朝始発の電車を待っての帰宅でした。

その後当協会で開催する会員展に一度参加いたしました。作品は二曲半双の高さ90cmの日月富士の屏風でした。その期間中に出品者と事務局の方々との懇親会があり楽しく過ごしたことを思い出します。

さて私の絵の創作について少し記します。私の使う主な絵画材料はキャンバスと油絵具です。ごくまれに和紙に水溶性絵具、膠で日本画の岩料や顔彩等を用い四曲の屏風や軸装として発表したりもいたします。油彩キャンバスの四曲屏風も数点描いて発表しております。今まで描いた最大サイズは500号です。この作品は1992年2月のニューヨーク旅行のスケッチ取材から生まれました。旅行の目的はアメリカニューヨーク・ニッポンギャラリーで開催された「山水・自然の美・日本クラブ」の展覧会出品にともないそのオープニングに参加する事でした。ニューヨーク市内を取材の途中、今は無くなってしまったツインタワーの110階の展望フロアからスケッチし、その印象から500号の『マンハッタン陽々』が生まれました。画面中央に緑青色の自由の女神、右に黄金色のエンパイア・ステートビル、左に白色のクライスラービル、自由の女神の背後に真赤な大きな太陽を配し放射状の光の帯を四方に、下部には高層ビル群を林立させた絵です。ニューヨークのあらゆるすべてを含むエネルギーに感動しその印象を表現した作品です。マンハッタンの代表的な高層建造物であったこのビルに行っていなければ500号の作品も生まれなかったかもしれない。

このことに思いを廻らすとき争いのない平和な世界をひたすらただただ願うばかりです。(この作品は北里研究所病院の大村記念館一階エントランスホールに常設展示されています。)



マンハッタン陽々 1995 248.5×333.3

もう一点作品にまつわるエピソードの特異性により紹介したい作品があります。この作品も北里研究所病院に収蔵展示されています。ある時診察の為この病院を訪れた婦人が壁に掛けられている『朝日』150号の私の絵をみて「生活苦で生きる力を失いかけていたがこの絵を見てもう一度生きようと頑張る気持ちになった」と強く思ったそうです。この婦人はこの絵を描いた人に会い一言お礼が言いたいと、当時横浜のデパートで個展をしていた会場まで私を訪ねて下さいました。貴重な体験です。

環境創造に貢献となると残念ながらまだ機会がありません。的外れなことと思いますが私のアトリエのある富士吉田市の「Fujisun street」と称される大通りには富士吉田商工会議所と商工会の街の活性化活動で、私の絵を原画に使い街路灯フラッグを作製し通りの両側の50本のポールに飾ってあります。原画のタイトルは「光降る街」太陽、富士そして富士吉田の街並みさらに市のシンボルである五重の塔を組合せた300号の絵です。この絵は富士吉田市の姉妹都市フランスのシャモニー市に寄贈いたしました。国際文化交流として富嶽三十六景個展（マジステックホール）を行なった記念としての寄贈でした。展示場では、幼稚園児から高校生までの幅広い年齢層の子供達と作品を通して交流を行いました。



朝日 1994 181.8×227.3



高橋幸子

画家

日本美術家連盟会員

仏教聖典を経営に活かす会会員

日本建築美術工芸協会会員

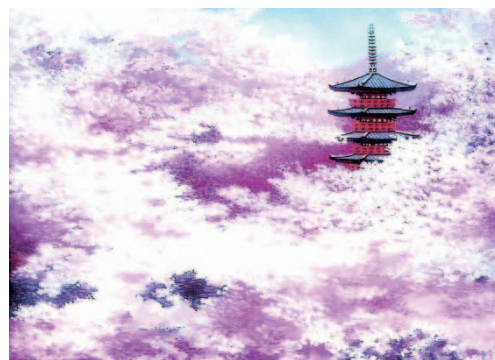
パリの裏街を思わせる風情ただようレトロな銀座のビル1階のギャラリーG2の女性オーナー狩野様と、ニューヨークでのグループ展出品の九州より上京してきた井上様と3人の楽しい個展旅行でした。

ニューヨークは現代アート主流で、私のような写実で古風な作品は受け入れて頂くのはとても難しいと思っていたのですが、3年程前からギャラリーG2のオーナーから、かえって純日本的な作品はニューヨークの方達から見ると新鮮に感じて頂けるのではないかとわれ、熟考の末、2014年10月に思い切って渡米する事にしました。丁度その頃、ダラスでエボラ出血熱の騒ぎが発生し、一時は心配しましたが、ニューヨークとはかなり離れているので、予定通り決行した次第です。

個展会場は、ニューヨーク・マンハッタン・ローアーイーストサイド（ニューヨーク東側）に位置し、ギャラリー名SPACE. WOMBといい、入口を金属の飾りでデザインしたおしゃれな雰囲気のパイン色の建物です。スペースは、床面積約17坪、天井の高さ4mの、殆ど真四角の白い壁に囲まれたすっきりとした空間でした。ギャラリーの前は緑の並木で周辺は画廊が多く、落ち着いて静かな佇まいでしたが、徒歩で4分程先は大通りなので、そこから人が流れて来て多くの方々がご来場下さいました。ニューヨークの方々に御興味をお持ち頂くのは難しい事だと思っていましたので、ご高覧頂くだけでもありがたい事だと思いました。御来場下さいました皆様は、それぞれ感じた事を気軽に語って下さったり、用意していたノートに丁寧に感想文を記載して下さいたりと、日本の個展会場と比較し、全ての方が初対面にもかかわらず、作家と御来場者の方との距離がとても近く親しみやすいように感じました。

出品作品は大小合せて30点、京都・奈良のお寺の風景、故郷三陸海岸の海洋風景等を展示し、繊細で優しく、きれいな色彩に仕上がるように努めました。イメージ的に米国の骨太で迫力があり、明るい雰囲気の中で、自分の大人しく、静かで細やかで落ち着いた作品が、少しでも心に留めて頂けるか疑問でしたが、自分なりに精一杯頑張って挑戦してみるしかないと思い決めて出品させて頂きました。

展示作品の中で、特に淡いピンクの沢山の桜の花の中に建つ五重の塔の風景、黄金色の光の中に佇む薬師寺の塔の風景が人気がありました。桜の花に五重の塔



「春爛漫」 ニューヨーク展出品作品

の作品は、恋人同士と思われる若いミュージシャンのカップルが、歌手の吉田拓郎の唄の「春夏秋冬」をイメージするとの事で、お求め下さいまして、感謝の気持ちでいっぱいでした。改めて国は違いますが、いにしえより多くの日本人が愛してやまなかった桜の花の美しさ、優雅さ等お分かり頂けるのだと思い、日本人としても誇らしく嬉しく思いました。



「花銭」 伊勢神宮奉納作品

余暇にはメトロポリン美術館の広大な建物の中を見学してまわり、沢山の素晴らしい作品の数々に大変感動致しました。特に絵画は興味深く、先々少しでも制作の参考にさせて頂いて活かす事が出来ればと思い、何度も見学しました。又、タイムズスクエアやエンパイアステートビルも訪れ、楽しい時を過ごす事ができました。

今回の個展でニューヨークの街を行き交う人々の活気やエネルギーを肌で感じ、沢山の元気や勇気を頂きました。まだまだ未熟では御座居ますが、自分なりに精一杯努力して描いた作品が、ニューヨークの方々に少しでも受入れて頂いた感触を得ることができましたし、ファンの方もできましたので、これを御縁に次回につなげて行ければ、ありがたい事だと思っております。

近い将来再び機会を作り、ニューヨーク展を企画し、今回御来場下さいました方々はじめ多くのニューヨーク市民の方々に御会いできます事を心より祈念して、今後も作品の制作に努力精進して参りたいと思っております。



吉川 盛一

建築・計画プランナー (Ph. D.)

株式会社ベクトル 代表取締役

日本建築学会、日本木材学会他
日本建築美術工芸協会会員
情報文化部部員

■ 建築素材の工法開発に身を投じて

私が社会に出た1980年代、建築業界は省庁共同における住建設の争奪戦のような時代だった。当時建設省・通産省が次代への住・生活産業への次代ビジョンを掲げた時代であった。それは資源制約と高齢化への対応があげられ3つの方向を掲げた。1. 経済大国としての国際的な貢献 2. 資源小国の制約の克服 3. 活力とゆとりの両立化であった。3. の活力とはつまりは技術力の新たな復権ということであり、それは建設のみならず、技術のソフト化や情報化、新素材・遺伝子工学等近年脚光を得ている骨格的技術のほとんどがその時代の所産でもある。第二次オイルショック以降に社会に出ることになり、当時の就職難も相まって思案をしたうえ、当時、建築研究所での材料実験等の経験からそこで接点のあった窯業系建材会社の技術部門に入社することになる。そんなことから当時の窯業系建材業界にて工法開発と実施、学会での施工要領案策定やJISの指針策定、技術特許管理を担当する。当時、仕上げ材として煉瓦質感が見直されれんがタイルという造語をつくり再燃、リバイバル化し市場を獲得していた。

技術面では仕上げ材を点から面へと移行する機運が高まり、なかでもタイル現場先付け等が台頭し安全・信頼面から急増する。その後、木造住宅での湿式施工を乾式化する方法も考案され、建築生産の流れと共にサイディングやPC化と安全性を具体化する工法の開発、実施等を推進する。また近年では2000年後の環境時代の到来より2003年シックハウス法を受け室内空気質の改善化としてホルムアルデヒドの吸着分解機能を有する無機系内装仕上げ材の開発に従事、外部耐力壁としても使用することで壁体内湿度の調整も図れる面材の開発を行い住宅建材として普及化を促した。

■ 土(セラミックス)— 自然素材は普遍の建築材料

歴史を遡れば、国内の陶器・陶芸という背景に瓦という建築要素を基に、江戸末期後の新たな技術として鉄を溶かすための要素技術— 白煉瓦 (耐火煉瓦) 製造が導入化、次に建築資材として明治初期の赤煉瓦が国策として西洋化・不燃化の象徴的な建材として導入された史実があり、大火が頻繁に起こる江戸城下を不燃化する「銀座煉瓦街計画」(明治5/1872年) にその一部に成就された。その後、1世紀を経て「新住宅開発プロジェクト」(昭和55~1985年) として煉瓦は脚光を得ることになる。約100年単位で時代は繰り返されているという事実がある。ならば次はと言うと2100年頃で2度あることは3度あるならその可能性はある!?とみる。

土は歴史が示すように紀元前から続く建築材料である。時代を経ても素材としての機能は朽ちることは無い。CO₂・地球温暖化の新たな視点より再考し、「土」の特性を活かし続ける次代へのテーマを見据え、どう具現していくのかを真剣に考える時期がきている。

土(セラミックス)の研究・開発とその展開

1978年建設省「技術開発制度」より煉瓦をパネル化する技術として認定され、①板壁と②型枠打込み工法として展開を図る。



住宅公園による露置試験体
撮影中 (つくば・建築研究所 20)

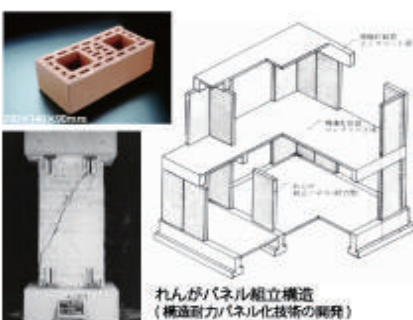


215×75×65mm



れんがパネル工法 (①板壁 ②型枠打込み)

1980年より5年間の通産省・新住宅開発プロジェクト研究開発委託事業により、煉瓦パネル組立構造の38認定を取得。また、補強組立構造 (RM造) は後に告示化され、ユニット (仕上げ) として製造時間・コスト面よりコンクリートブロックが優位となり市場化される。

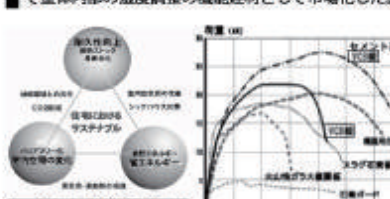


れんがパネル組立構造
(構造耐力パネル化技術の開発)



補強組立構造 (Reinforced Masonry)

2003年シックハウス法制定より室内空気質の改善を目的として開発。内装壁材にホルムアルデヒド分解・調湿機能を持たせ、また同材を外部耐力壁に認定化することで壁体内部の湿度調整の機能建材として市場化した。



□ 枠が組立・調湿を促した多機能ケー
酸カルシウム系のカパフォームによる
湿度一定化性能



木造住宅・実大実験試験



木造住宅・インテリア内装仕上げ材
木造住宅への内装仕上げ+構造耐力要素として再考



今里 隆

建築家

元東京藝術大学客員教授
元日本建築美術工芸協会会員

私は東京美術学校で、現在の東京藝術大学ですが、建築を学びました。美術学校での師は、近代数寄屋建築を確立した建築家、吉田五十八でした。師の作品は、日本芸術院会館、大和文華館等多数ございますが、2013年に開場した新しい歌舞伎座の建て替え前の歌舞伎座も作品の一つでした。戦災で道路に面した外観の一部だけを残して、殆どが破壊されてしまった歌舞伎座を、戦後すぐに吉田五十八設計で改築したのです。

新しい歌舞伎座は、戦後の開場当初の意匠に戻すというコンセプトで建て替えられたので、師の下で改築に関わっていた私が、今回は監修という立場で関わらせていただきました。開場して以来、以前の雰囲気そのままを味わうことができると多くの皆様がおっしゃって下さるので、監修としての役割を無事果たすことができたかと安堵しております。



私が吉田五十八に出会ったのは1945年、美術学校に入学してすぐでした。お誘いを受けて研究室に入り、1964年に独立するまで、設計に携わりながら、日本建築の真髄を学びました。独立して自分の事務所を創設してから約50年、日本建築をどのように現代に活かしていくかを目指して、歩んでまいりました。幸いお施主様に恵まれて、国技館、平山郁夫美術館、成川美術館、日本美術院、池上本門寺大客殿と御廟所、京都醍醐寺霊宝館と伝法学院、池坊本部ビル、金田中、大平正芳邸、平山郁邸等、規模の大きなものから個人住宅に至るまでいろいろな建物を設計することができました。木造の住宅もかなり多く手掛けました。



国技館



平山郁夫美術館

日本建築の美しさは、プロポーションにあると思います。建築家として大切なのは、美しいプロポーション、つまり比例の感覚を自分の中に取り込むことです。

どうしたら比例の感覚を身につける事が出来るのか、形の美しい古建築を数多く見ることで、そして同じものを何度も見ることが、大切です。

奈良時代は大陸の影響で伸びやかで大らかな美しさ、平安時代は日本特有の美が確立されて優美な形、武家の時代になると力強いものというように、時代が求める美の違いがありますが、国宝に指定されているものは、殆どが美しいバランスを持った建物なので、国宝の建物を数多く見ることによって、美しさを見分ける目を養うことができます。そして何度も出かけて様々な角度から建物をとらえることが、本物を見極める目を造ります。国宝の古建築をいくつか取り上げてお話ししましょう。

法隆寺五重塔は、現存する最古の塔です。一番上の屋根が一番下の屋根の丁度半分の大きさになっていて、間の3つの屋根もバランスのよい大きさで構成されています。屋根の大きさの差が、建物全体にどっしりとした安定感を生んでいるのです。東京美術学校の学生だった頃に友人と共に法隆寺に見学に出かけたことがあります。丁度五重塔が解体修理中でその責任者である浅野 清先生からお話を伺いました。

そのお話の中に「五重塔は左右対称ではない」との言葉がありました。

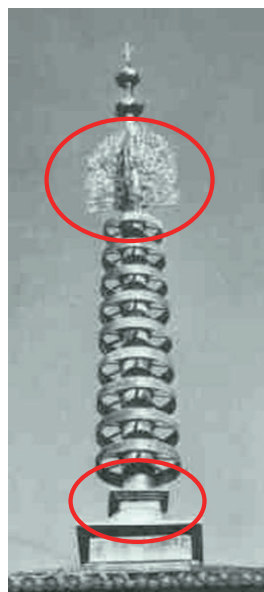
「五重塔を解体してみると、左右対称になっていなかった。金堂と五重塔、バックの山、植栽等も考えながら、遠くから見た時の全体のプロポーションに力強さを加えるように、五重塔の形を作り上げていったのではないかと。左右対称につくるべきところ、遠景を含めた全体のプロポーション、比例を大切に考え、敢えて非対称にした。当時の棟梁は、凄い。」という内容でした。「左右対称ではない」この言葉は、建築はシンメトリーであるべきだと確信していた当時の私の考えを、根本から覆すものでした。この時から、建物そのものだけでなく遠景をも含めて比例を大切にし、周囲との調和をはかるということが、私の建築設計における基礎となりました。屋根の大きさの差で安定感を出し、周囲の景色を含めてプロポーションを決めていく、古の人々のデザイン感覚の凄さを痛感します。



約1300年前、奈良時代に建てられた薬師寺東塔は、軽快なリズムが感じられるような美しい塔です。一見六重塔に見えますが、三重塔です。三重塔に各階ごとに裳階をつけています。裳階は建物及び柱や壁の彩色を雨、湿気、日光から保護する役目がありますが、保護の役割だけでなく裳階があることによって、大小の軒の絶妙なバランスが生まれます。



リズムを感じさせる三重塔の外観は、美術研究家のフェノロサが「凍れる音楽」と称したこともあり、日本で最も美しい塔とされています。こちらは東塔の屋根の上にある相輪の詳細ですが、受花と呼ばれる部分が、現存する日本の他の塔では円形で上を向いた八枚の蓮弁を付けた形をしているのに対して、この東塔は、四角の形をしており、その四隅に蓮弁の飾りを立てた穴があります。

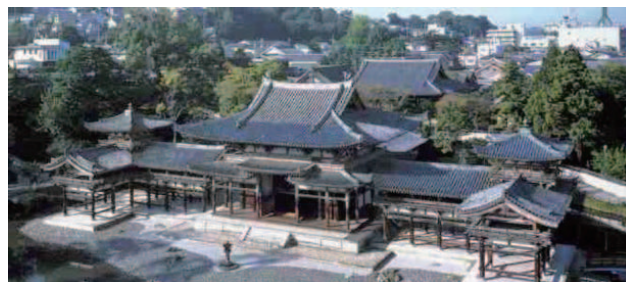


この受花の形は平頭と呼ばれ、中国の仏塔に見られる古い形式です。水煙も、他の塔では、火炎と唐草を単独もしくは一緒にデザインしたものが殆どですが、この塔の水煙は、天人と雲の美しいデザインとなっています。特殊な意匠を持つ塔なのです。建築史家の大岡 實氏が著書の中で「要するに建築の造形が成功する為にはまず、全体の比例、次に建築各部材によって作られたパターンの間のバランス、そしてそのパターンを構成する各部材の比例とバランス、さらにそれを助ける細かい部分の形など、全部がその建築の持つ造形的意匠の根本精神を成功させる方向に向かっている必要はない。これが建築造形の原則である。」と言っておられますが、この薬師寺の東塔は、屋根と裳階のバランス、細部の直線的な力強さを持ちながら固さを感じさせない軽快な意匠、そして水煙に見られるような繊細さ、全てが合わさって、まさに造形的意匠の根本精神

を成功させる方向に向かっている建築ということが出来ます。

1982年(昭和57年)に西塔が再建されましたが、再建に携わった西岡棟梁によりますと、西塔は、東塔の高さより30センチ高く、軒反りも東塔より大きく造ったそうです。塔を組む時に、横方向に積んだ木が次第に縮んでいき、千年後には東塔と同じ高さ、軒の反りも東塔と同じ姿になるという計算でそのように造ったそうです。木を材料とする日本建築の奥深さ、千年という長い時間の単位の仕事を知ることができます。

私は、日本の建築の歴史の中で、平安時代に建てられた建物が繊細、優美で、最も美しいと思っています。鎌倉時代に大陸から伝わった大仏様と禅宗様の建築、そしてそれに影響を受けて変化を遂げた和様の建築には、彫刻装飾や多くの曲線が加えられて、美しさが余り感じられません。現存する平安の最も美しいと思う建物は、平等院鳳凰堂です。



平等院が位置する宇治川のほとりは古くからの景勝地で、もともと貴族の別荘として建てられたものでした。それを藤原道長が購入して山荘とし、道長の没後、息子の頼道が阿弥陀堂を造営して仏教寺院としたのが、平等院です。阿弥陀堂は形が、両方の翼を伸ばした鳳凰に似ていることと棟の上に一對の鳳凰を置いていることから、鳳凰堂と呼ばれるようになりました。阿弥陀如来像が安置されている中堂には裳階が三方にあり、入母屋、切妻、方形、様々な形の反りのある屋根が織り成す調和は、景観に溶け込み、正に極楽浄土の世界が美しく表現されています。

国宝、三仏寺投入堂も、平安時代に建てられた建物です。三仏寺は、鳥取県の急峻な山に転々と堂が建てられた典型的な山地寺院です。その中に投入堂と呼ばれる国宝に指定されているお堂があります。山頂に近い崖の上の窪みの中に建っていて、丁度下からその窪みの中に建物を投入したように



見えるので、投入堂と呼ばれるようになったのですが、断崖に建っているの、柱の長さは一定ではありません。地盤に応じた柱の長短が急斜面に崖面と巧みに溶け合っています。柱と垂木には平安時代の繊細な比例が見られ、縁の上に立つと軒に手が届く程の小さな建物にもかかわらず、自然と一体となることによって、大きな景観を作り出しています。自然との融合、調和を重んじる古来の日本人の美意識が、作り出した平安時代の優れた建築です。

古建築には、増築や改築されることによって、以前より形が美しくなった建物が、いくつかあります。その一つが東大寺の三月堂、法華堂です。



法華堂は、諸説がありますが、746年頃に、東大寺の前身となった金鐘寺の本堂として建立されたと言われています。創建当初は、寄棟造りの正堂と礼堂が軒を接して建つ配置だったようですが、鎌倉時代に礼堂を入母屋造りに改築して、正堂と礼堂を繋ぎました。創建時、天平時代初期の正堂と鎌倉時代の大仏様の特色が見られる礼堂が見事に調和し、美しい姿になっています。

唐招提寺の金堂も、改築で屋根の荘厳さが増したことによって、バランスの取れた姿となりました。天平時代に建立された時は、軽快な屋根で、現在の金堂より大人しいイメージの建物でした。



何度か改築や補修がなされましたが、主に江戸時代の改造と明治31年から32年にかけての修理で、こちらのように重厚さが感じられる形の屋根となりました。

和辻哲郎氏が「古寺巡礼」の中で、「軒端の線が両端に至ってかすかに上へ湾曲している、あの曲がり具合一つにも屋根の重さと柱の力との安定した釣り合いを表現する有力な契機がひそんでいる。そこに働いているのは、優れた芸術家の直感であって、手軽に模倣を許すような型に、はまった工匠の技術ではない。そういう感じを抱きながら堂の正面へ出て、堂全体を眺めると、今更ながらこの堂の優れた美しさに打たれざるを得なかった。」と述べています。屋根が外観に与える影響がいかに大きいのかということ、屋根と軸にあたる部分との調和、バランスが建物の美しさを造ることが、よくわかります。和辻氏が絶賛した屋根は、長い年月の間に軒先が徐々に垂れ下がっていましたが、1998年から2009年まで行われた解体修理で、補強材を加えることによって軒先が上がりました。軒先が上がる事によって、重厚な伸びやかさがある美しい屋根を取り戻す事ができたと思いますが、まだ私は、平成の解体修理後の実物を見ておりませんので、何とも申し上げる事ができません。

長年の歳月の中でその時代の最先端の技術で改築、増築、補強という再生を繰り返しながら、古建築は長い歳月を生き続けていくのです。数百年の時代を隔てての増築や改築で、建物として完成度の高い美を造り出すことができた先達の技、感性の素晴らしさを改めて感じます。長い年月の中で、どの部分をどのように変化させ、バランスの取れた美を作り出せたのかという視点で見ると、古建築が一層面白くなります。

ところで、唐招提寺金堂の正面には柱が8本並んでいます。この柱の間隔は中央が広く、両脇にいくに従ってしだいに狭くなり、建物に安定感を与えています。この手法はギリシャのパルテノン神殿の柱にも見られ、造形的に鋭い感覚をもった人達のデザインの行きつくところは、洋の東西を問わず、共通しているようです。少し話が本題から逸れますが、パルテノン神殿の柱には、他にも工夫がいくつか見られます。並ぶ柱の中で、隅の柱をわずかに太くしてあります。これは、隅を太くすることで正面から見た時に強固に支える感じが出る為と、もう一つ、建物を斜めから見た場合、隅の柱の背後は明るい空になるので、柱が黒く見え、他の柱の後ろは建物である為、柱は白く明るく見える、黒く見える柱は、白く見える柱より同じ太さでも細く見えてしまう、そこで柱を全部同じ太さにしないで、隅の柱を太くして全体のバランスを取る工夫をしたのです。また、柱の下の方の基壇が、正面も側面も、中央でほんのわずかに高くなっている、これも全く平らの場合、中央が下って見えてしまう、その錯覚を防ぐ為の工夫なのです。鋭い造形感覚と美を追求する貪欲な姿勢を改めて感じます。

京都御所は、南北朝時代に現在の場所に建てられてから何度も焼失してしまい、造営が繰り返されてきました。現在の御所は、1855年に平安朝の様式を用いて、復興されたものです。



紫宸殿は、御所の正殿で、平安時代の繊細な意匠が見られる建物ですが、屋根だけが、勾配が急で重々しく、平安朝の優雅な趣を損ねているように思います。建物全体としてバランスの悪さを感じますが、この屋根の大きさが人々に威圧感を与え、また遠くまで天皇の威光を示す一役を担っていたのではないのでしょうか。近づくくと人間の目の高さからは屋根は見え、このような形に見えます。



このプロポーションはとても優雅で美しく、現代の建物にも応用できる形です。紫宸殿の南には白砂をまいた庭が広がり、その周囲には低い平らな廻廊がめぐらされています。廻廊と東西南北に置かれた門は丹塗りで、白砂との色の鮮やかな対比が、木の色そのままの紫宸殿と不思議に調和しています。ベルサイユ宮殿に代表されるようなヨーロッパの王宮の豪華さとは全く違う簡素な美しさは、古から清々しさを好む日本人の美意識の象徴と言えるのではないのでしょうか。

民家建築の中にも重要文化財に指定されている美しい形のものがああります。ここで一つ取り上げてみます。

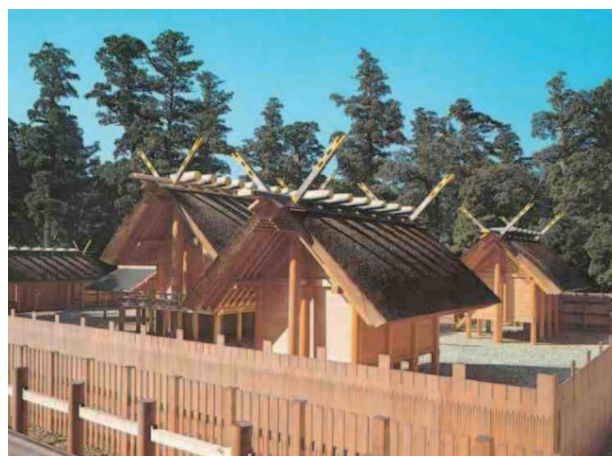
箱木家住宅は、江戸時代の文献に806年に建てられたとの記載があり、千年家と呼ばれる兵庫県神戸市に残る茅葺入母屋造りの代表的な古民家です。

実際は、主屋が15世紀、室町時代の末期に建てられたもので、江戸時代になって西側に離れが造られ、二棟が並ぶ形になったと考えられています。



ダム建設の為に、現在地に移築されましたが、昔のままの姿を留めており、屋根の棟飾りの意匠は、二棟共通しています。母屋と離れ座敷の間の重なり合う軒下には、雨落の溝があります。二棟の茅葺の屋根が並ぶ様子に、バランスのよさが感じられます。

伊勢神宮は、2013年が丁度、遷宮の年に当たり、皆様報道で何度か目にされたことと思いますが、20年に1度、建て替えられるので、厳密に言えば、古建築ではないのですが、古来の姿を留めている建物なので、その美しさをお話させていただきます。神社建築の原形は、高床式の倉をモデルとして造られた単純明快な直線的な意匠のものでした。神聖化が進むに連れて、鍔金物の装飾が千木や破風、高欄の先端に施されるようになりました。



社殿は、木材の中で最も格調が高い桧で造られています。新しい桧は、諸処に施された金の装飾に、引けをとらない輝きを放ちます。以前建て替えが終わったばかりの時に見学したことがあります。社殿全体が黄金色に輝いて、周囲の杉林の緑の中に映え、非常に美しかったのを思い出します。複雑な装飾を避けて、桧という美しい木材のもつ直線的な性格をそのまま意匠の基盤とした「清々しい単純明快さ」、そこに日本人本来の造詣感覚の原点があるように思います。

(次号へつづく)

環境・文化・未来の
グランドデザイナー



三菱地所設計
取締役社長 大内政男
www.mj-sekkei.com



夢から未来を始めよう。

子どもたちに誇れるしごとを。

SHIMIZU CORPORATION
清水建設

シミズ・ドリーム 検索

ソメノの床はアスリートをささえ、
夢と感動を創造します。

ソメノの鋼製床下地材

ジム・エース

多目的アリーナの床構造を考えた
スーパーG 高い反発力を発揮する鋼製加工
スーパーL



鋼材下地の総合メーカー
株式会社 染野製作所

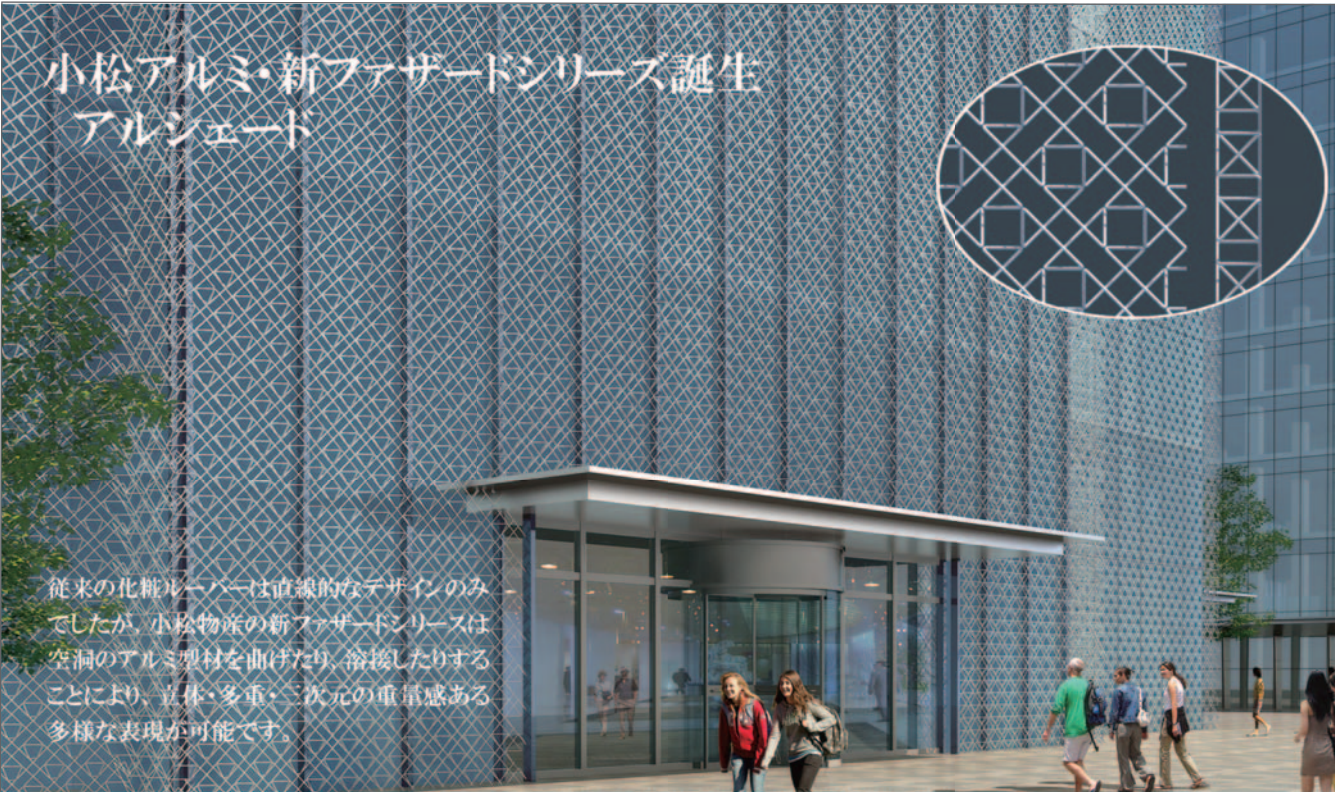
東京 本社 〒144-0031 東京都大田区東田町7-40-1 (池田ビル) TEL:03(3736)0000 FAX:03(3736)0787
大阪 支店 〒552-1227 大阪府大阪市東淀川区東中島1-10-10 TEL:06(6527)3131 FAX:06(6527)3133
札幌支店 〒060-0801 北海道札幌市中央区南一条西5-1-10 TEL:011(531)1111 FAX:011(531)1112



可児アトリエ
Kani Atelier

可児才介
kaniatelier@live.jp
150-0036東京都渋谷区南平台町12-9-503

小松アルミ・新ファザードシリーズ誕生
アルシェード



従来の化粧ルーバーは直線的なデザインのみでしたが、小松物産の新ファザードシリーズは空洞のアルミ型材を曲げたり、溶接したりすることにより、立体・多重・三次元の重量感ある多様な表現が可能です。

株式会社 小松物産
<http://www.komatubussan.co.jp>

本社 〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町6-9-8 小松ビル	TEL:06-4700-6077 FAX:06-4700-6078
東京 〒110-0014 東京都台東区北上野2-11-14 小松上野ビル	TEL:03-5827-3781 FAX:03-5827-3780
中国工場 〒300-350 中国天津市津南区白塘口白万路7区13排16号	TEL:022-2858-6688 FAX:022-2858-1471

LEGION CONSERVATIVE

□建築設計
インテリアデザイン
スペースデザイン
info@Legion.co.jp

レジオン・コンサバティブ株式会社一級建築士事務所
〒113-0022 東京都文京区千駄木3-29-11F 03-3828-5389
代表取締役 三上 紀子



スタートはなぜ賃貸住宅にアートを設置するのか



この街をもっと愛される街にしたい。
その思いで『街なかミューゼ』がはじまりました。
街を豊かにするアート、募集中です。

お問合せ先
スタートCAM株式会社
TEL 03-6860-3330
www.starts-cam.co.jp

環境と共に生きる

サンキルーバ

<http://www.sanki-louver.co.jp>

防水ルーバ(サンキルーバ)

雨水の浸入をシャットアウト

開口率最大75%を実現

用途:換気口 換気塔 機械室など

防音防水ルーバ(エースルーバ)

通気を確保しながら、音をシャットアウト。

更に雨水の浸入も防ぐ

用途:ボイラー室 ポンプ室 電算室 電気室 など

屋根用防水ガラリ(スカイバーゴラ)

屋根型ガラリでありながら雨水の浸入をシャットアウト

熱の放出に効果絶大

用途:屋上空調機械置場 など

他、ルーバ各種取り揃えております。



三基ルーバ株式会社

東京都中央区日本橋富沢町7-13 洋和ビル8F

TEL 03-5645-7888

FAX 03-5645-7890

納入実績

東京ミッドタウン

丸ビル

ペニンシュラホテル

虎の門ヒルズ 他



美しいものを作り出す技術の結集により、既製品では飽き足らない
お客様の夢を形にしてきました。あなたのこだわり承ります。

X.S 株式会社 エクシズ <http://x-s.jp>

集いと学び空間
をデザインする。

超軽量メッシュスタッキングチェア

Lush (ルッシュ) は、3次元カーブの背もたれに6角形のパンチング加工がされ、優れたホールド感が得られます。また座面のメッシュシートとのコンビネーションにより3.3kgという超軽量を実現しました。



Lush (ルッシュ)



愛知株式会社

東京本部 〒104-0033 東京都中央区新川1-17-25 東茅場町有楽ビル1F

AICHI TEL: 03-6222-0816 FAX: 03-3555-0016

「アピアランス」募集のお知らせ

会員の皆様の情報発信の場となる「アピアランス」のページを新設いたしました。

個人・法人会員を問わず、会員の活動・広告等にご活用ください。

次号以降も継続して参りますので、奮ってご参加ください。

料金は・1コマ1万円 (2コマ以上も歓迎です。)

問い合わせ先 総務委員会 会報編集部会

Tel 03-34571598 Fax 03-3457-7998 E-mail simpo@aacajp.com

新入会員

個人会員

はやしまりこ	〒272-0025	市川市大和田4-16-3	TEL 047-377-3031	(株)エーアンドエム
藤原貴子	〒170-0003	豊島区駒込1-10-13 トーア駒込417	TEL 03-5976-8160	プランニングステージ
川瀬俊二	〒140-0002	品川区東品川2-1-11	TEL 03-6710-0600	(株)梓設計

法人会員

スターツCAM株式会社	代表取締役 直井秀幸	担当 営業本部 福丸敦之
〒103-0027	中央区日本橋3-4-10	TEL 03-6860-3330
ナブコシステム株式会社	代表取締役社長 山村 望	担当 営業統括部開発営業部 鈴木敏正
〒105-0001	港区虎ノ門1-22-15	TEL 03-3591-6411
YKK AP株式会社	ビル東京支社営業統括部 堀 剛	担当 代表者と同じ
〒130-8521	墨田区亀沢3-22-1 YKK60ビル7F	TEL 03-5610-8430
大光電機株式会社	開発営業部 統括部長 津下庄一	担当 代表者と同じ
〒130-0026	墨田区両国4-31-17	TEL 03-5600-7793
旭ビルウォール株式会社	代表取締役社長執行役員 櫻井正幸	担当 経営管理部 人事総務グループ 生駒哲朗
〒111-0036	台東区松が谷1-3-5 JPR上野イーストビル8F	TEL 03-5806-3110

会員の異動

川瀬俊二	勤務先変更	〒144-0041 大田区羽田空港1-7-1	TEL 03-6710-0686	(株)梓設計
細井健二	住所変更	〒190-0032 立川市上砂町5-14-18	TEL 042-849-6771	(株)細井エンタープライズ
株式会社 竹中工務店	代表者変更	菅 順二 執行役員設計本部長（前 車戸城二）		
	担当者変更	種石浩史 設計企画部部長（前 坂本和彦）		
TOTO株式会社	代表者変更	佐藤仁美 マーケティング本部渉外部担当課長（前 江藤祐子）		
(株)大林組	代表者変更	小林照雄 常務執行役員設計本部長（前 川瀬俊二）		
	担当者変更	山本朋生 設計本部本部長室長（前 川瀬俊二）		
(株)クマヒラ	担当者変更	若林 健 企画本部企画部製品企画室室長（前 川田 充）		
西松建設株式会社	担当者変更	神山悟士 建築事業本部建築設計部部長（前 安部修一）		
	住所変更	港区虎ノ門1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー10階	TEL 03-3502-7625	
コトブキシーティング株式会社	担当者変更	白鳥裕一 営業本部営業開発部第一営業開発室長（前 高山政幸）		
東京ガス株式会社	代表者変更	児山 靖 エネルギーソリューション本部 都市エネルギー事業部長（前 大谷 勉）		
	担当者変更	甘利健一 都市エネルギー事業部法人営業第一部主任（堀添智彦）		
株式会社 メックデザイン・INT	担当者変更	佐藤 剛 業務統括部 ユニット統括マネージャー（紅谷芳明）		

東日本大震災「芸術文化復興預金」への募金のお願い

2015年7月末現在 109,511円

協会では、東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体へ27年度に寄付を行なう事になり預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたします。

復興預金口座は下記に記載いたしました。

ゆうちょ銀行 港芝五支店（店番：019）当座預金 口座名：AACA芸術環境復興預金口座 口座番号：0338383

編集後記

このたび25周年を期して会報の構成を刷新し、表紙には会員の作品、内容も会員の皆様の活動や、一般の方々からの寄稿文等を中心に編集致しました。

会報編集部会は、会員の有志の皆さんで編成され、記事の収集から編集・発送まで協力して運営されています。

会員の皆様の作品紹介、活動報告、展覧会、個展・出品展等のご案内、企業の広告等を会報に掲載いたします。

詳しくは会報編集部会にご相談ください。

発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
発行人 会長 岡本 賢

〒108-0014

東京都港区芝5-26-20 建築会館6階

Tel 03-3457-7998

Fax 03-3457-1598

Url <http://www.aacajp.com>E-mail info@aacajp.com

編集 総務委員会 会報編集部会

部会長 野口 真理

部員 飯田 郷介 石田真人 竹生田 正

中村 弘子 山崎和子 山崎 輝子

事務局

美和野印刷株式会社

印刷協力

